

「ビバ ブラジル！」

「セルラー！セルラー！」暗くなりかけた公園脇から若い二人組みが現れて、私にそう叫びながら迫ってきた。ブラジルに住み始めたばかりの私の嫌な予感の的中、拳銃強盗だった。

ブラジルはカード社会である。水を買うのもカードで済ませる。現金を持つと狙われるだけで、ろくなことがないからほとんど持ち歩かない。強盗もそのあたりの事情を良く分かっており、高価で換金性の高い携帯電話（セルラー）を一直線に狙ってくる。財布を出せとも言わず、セルラー！セルラー！と叫びながら拳銃を突きつけてくるのだ。

その場では、なるほどこんな感じで襲われるものなんだ、と冷静（なつもり）だった。強盗が何か捲くし立てているのも、習い始めのポルトガル語能力でも聞き取れるくらいの落ち着き様だった（と思

う）。でもこういう経験は、ボディーブローのように後からずしりと効いてくるようだ。普段横断歩道で信号待ちしているときの背後の気配、自分のアパートから出入りする時の周囲からの視線、運転中にすれ違うオートバイの目線などなど、まるで自分がスパイ映画の主演にでもなった気分だ。月一くらいは襲撃される夢を見るし、酷いときは相手の攻撃をかわした瞬間にベッドから転げ落ちたことも。そんなの小学生以来だ。

だからといって、自分のブラジル駐在生活が辛くてしょうがなかった訳では決してない。むしろ楽しいことのほうが多かった。何よりも業界や年齢を問わず、本当にいろいろな人達と知り合うことが出来



サッカーの試合：負けても決して悲観しない



カーニバル風景：この日のために1年間過ごすといっても良い



バーベキュー：どのご家庭にもこのスペースがあり毎週末パーティー

たこの経験は、一生の宝である。一緒に酒を酌み交わし、週末ゴルフに勤しんだり、南米旅行に繰り出したり、音楽バンドで共演したりと。ブラジルに来る者はみな（少なくとも自分以外は？）個性の塊、特に移住で来た方々は本当に味わい深い。死ぬほど苦勞して今に至っているはずなのに、そんなのおくびにも出さない。ブラジル人もそう。昨日会社をクビになったと嘆きながら、今晚のバーベキューパーティーの予定を楽しそうに話している。あの前向き感とマイペース感は、人生観を変えさせてくれる。おかげで襲撃されたトラウマも、今では自分にとって笑い話の一つです。（T.H）